

メドウフェスク新品種「トモサカエ」

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	大同, 久明 寺田, 康道
巻/号	43巻12号
掲載ページ	p. 565-565
発行年月	1988年12月

メドウフェスク新品種「トモサカエ」

大同久明 寺田康道

登録番号：メドウフェスク農林合1号
系統名：北海6号

はじめに

メドウフェスクは、わが国の寒地・寒冷地によく適応する多年生イネ科牧草である。形態はトールフェスクに似ているが、より小型で草質も粗剛ではなく、家畜の嗜好性も良い。競合力が適度であることから、オーチャードグラス、チモシーを主体とする草地に混播で利用されており、北海道ではチモシー、オーチャードグラスに次ぐ重要イネ科草種として栽培されている。

メドウフェスクはこれまで国公立機関の育成品種がなかったため、外国品種および国内民間育成品種が栽培されていたが、今回新品種「トモサカエ」が登録され、初めての国の育成品種として普及に移されることになった。

特性の概要 「トモサカエ」の出穂期は、早生品種の「ファースト」と同じか1日程度遅く、早生に属する。

「トモサカエ」のおもな特徴として、越冬性が優れていることがあげられる。越冬条件の最も厳しい北海道東部の根釧農試における耐寒性は、フィンランド育成で耐寒性が強いとされる「タミスト」と同等に優れており、新潟農試における耐雪性も強にランクされた。

また、重要病害の一つである網斑病抵抗性も「ファースト」、「タミスト」より優れており、これも「トモサカエ」の特徴である。

乾物収量は、北海道、本州とも「ファースト」よりやや多収を示し、とくに越冬性に優れることから北海道東部での収量性は「ファースト」比108~110と高い。

飼料成分では、粗繊維含有率が低く、粗蛋白質などがわずかに高い傾向を示す。

「トモサカエ」の主要特性

品 種	出穂始 (月日)	越冬性	耐寒性	耐雪性	網斑病	放牧前 草 量	乾物収量	
							北海道	本州
トモサカエ	6.7	2.0	3.5	強	1.9	2.3	105	108
ファースト	6.6	2.2	4.0	中	2.3	2.7	100	100
タミスト	6.8	2.3	3.5	強	2.2	2.5	96	98

出穂始：北海道平均、越冬性：1良~5（北海道）、耐寒性：1極強~5（根釧）、網斑病：1微~5、放牧前草量：1多~5（新得）、乾物収量：ファーストを100とした比率（北海道5場所、本州4場所の試験期間合計収量）

Hisaaki DAIDO, Yasumichi TERADA: A New Meadow Fescue Variety "Tomosakae". 農業技術 43 (12), 1988

放牧利用では、再生力が優れているため各放牧時の現存草量が多く、放牧適性は高い。

シロクロバとの混播ではマメ科率を低く抑え、マメ科牧草優占草地になりにくい。またオーチャードグラス、チモシーとそれぞれ混播した場合は、「トモサカエ」の生育が良好で、メドウフェスク収量および合計収量に占めるメドウフェスクの比率は「ファースト」、「タミスト」より高い傾向がある。

適地および栽培上の注意 北海道および本州中部以北の高冷地に適する。放牧、採草および兼用草地の混播用草種として、オーチャードグラス、チモシーなどのイネ科牧草およびシロクロバなどのマメ科牧草との混播に適する。またメドウフェスク主体の放牧用草地にも利用できる。

命名の由来：混播に適し、他の牧草とともに草地を栄えさせる。

育成後記 当研究室では、昭和37年からメドウフェスクの育種を始め、51年に「北海1号」が新品種候補となったが、農林登録には至らなかった。その後、新たな育種材料の展開、道内生態型の収集、保存栄養系の再評価など、越冬性、耐病性に優れた多収品種の育成を目標に選抜を進めた。越冬性の選抜には耐凍性幼苗検定も活用された。その結果、導入品種、育成系統、道内生態型から最終的に4栄養系が選抜された。「トモサカエ」はそれら4栄養系による合成品種である。

メドウフェスクは他のイネ科基幹草種との混播で利用される場面が多く、栽培利用の面では必ずしも十分な試験研究の蓄積があるとはいえない。今回の「トモサカエ」の育成における一連の試験のなかで、放牧特性検定ではこの草種の持つ放牧適性の優秀さが認められた。メドウフェスクの持つ特性をうまく生かすにはメドウフェスク主体の放牧利用が有望であろう。「トモサカエ」の育成を機会に、放牧利用を含めメドウフェスクの栽培利用面での試験研究が発展し、その価値が再認識されることを期待したい。

育成従事者：寺田康道、大同久明、荒木博、宝示戸貞雄、杉田紳一、伊藤公一、雑賀

優、阿部二郎

（北海道農業試験場イネ科牧草育種研究室）